

## 100号記念号

### □ 巻頭言

日本臨床検査専門医会  
会長 渡辺 清明

長年、臨床検査専門医に愛読されてきた JACLaP NEWS が今回で第 100 号となった。

そこで本号では、情報出版委員会の意向を受けて、JACLaP NEWS 100 号記念と銘打って歴代会長からお言葉を頂き、また 100 号の記念座談会を行いその内容をお届けする事になった。

1983 年に日本臨床検査専門医会の前身である「臨床検査医会」が正式に立ち上がり、本年は日本臨床検査専門医会 25 周年を迎え、7 月に記念式典が湯島の東京ガーデンパレスで開催された。

JACLaP NEWS は、日本臨床検査専門医会の前身の立ち上げから 8 年後の 1991 年に第 1 号が発刊されたため、25 周年と時を同じくしてこの度 100 号が発刊される運びとなった。

初代編集主幹の戸谷誠之先生のご司会の下、歴代の主幹の先生方にご参加頂き、記念座談会を設けさせて頂いた。

JACLaP NEWS は臨床検査専門医へ最新ニュースを非常に読みやすい形で編集し、お届けしているため、多くの会員に人気のある情報紙である。個人的にも、比較的短時間で読み切れるし、コンパクトに話題が集約されているので、毎回隅から隅まで読ませて頂いている。

今回、100 号を発刊するに当たり、歴代の編集主幹およびこれに携われた多くの会員諸氏のここまでの多大なご尽力に対し深く感謝する次第である。また、その具体的な苦労話は是非座談会の中でお読み頂きたい。

なお本会として、今後も JACLaP NEWS は継続発刊する事が決まっております、さらにブラッシュアップして皆様にお届けできると確信している。

言うまでもなく臨床検査は医療に必須のものであり、専門医の中での迅速な情報交換は臨床検査の発展に必要である。

今までに増して、会員の先生方の JACLaP NEWS へのご支援、ご鞭撻をお願いする次第である。

### □ JACLaP NEWS 100 号発刊記念に寄せて

河合 忠 国際臨床病理センター所長  
(日本臨床検査専門医会初代会長)

本会の前身である「臨床検査医会」が産声を上げたのが 1982 年 11 月 27 日で、その後 1990 年 4 月 1 日からは「日本臨床検査医会」に改組し、その後「日本臨床検査専門医会」に名称が改められて今日に至っている。発足当初の詳しい経緯については、筆者が古希を迎えて、2001 年に発刊した「河合忠が語る臨床病理史—世界の中の日本—」(発行：国際臨床病

理センター)に書き残している。その中に、JACLaP NEWS に 1991 年～1999 年の間に掲載した巻頭言などを「第 8 章 臨床検査医に託す夢」と題して集録した。それらを改めて読み返し、20 世紀終末から 21 世紀を迎えようとしていた激動の様子が走馬灯のように脳裏に甦ってきた。考えあぐねた結果、創刊号(1991 年 2 月)に寄せた筆者の巻頭言が未だに将来を担う若い会員諸兄姉への提言として引用することとした：

『……………過去において、臨床検査医の新しい活躍が今ほど望まれている時は無かったと思う。近い将来、臨床検査はもとより医療全般について大きな転機が予測されている。時代の流れに抵抗するのではなく、来るべき時代へ慎重に対応することこそ、今、われわれに必要な行動であろう。会員一人一人が真剣に考えて行動すべきことは当然であるが、それに加えて目的を一つにする仲間が大同団結して討議し、行動を起こすことによって、さらに効果が増すはずである。わが国ばかりでなく、世界の先進諸国においても、実践的医療(Medical Practice)の中で臨床検査はどうあるべきか、それを実践する臨床検査医の望ましい役割は何か、が問われている。臨床検査を通して得られる情報量は無限とも言えるほど膨大である。それを臨床検査医が最大限に利用して、日常診療に貢献することこそ臨床検査医の確固たる地盤の確立につながるかと信ずる。従来、ともすれば膨大な検査情報の医学的利用を、大部分、臨床医に任せてきたのではなかったか。一人一人が貢献できる範囲は少なくとも、すべての臨床検査医がその方向で努力すれば大きな果実となって新しい医療の場で着実にその地歩を築くことができるはずである。……………』

この 20 年、会員諸兄姉の努力によって大きな成果を挙げつつあるが、さらに大きな成果が望まれる分野も残されている。古き慣習に捕らわれる必要はないが、しかし過去の実績の上に立った新しい時代に適応した変革に向けての一層の努力に期待している。

### □ “検査医学と臨床検査専門医”

大場 康寛 近畿大学名誉教授  
(日本臨床検査専門医会第 2 代会長)

検査医学は臨床医学と基礎医学と、その周辺学域(化学、理学、生物学、薬学、機械工学、電子工学、情報科学など)の知識と技術を組み合わせた臨床検査を駆使して 各種生態情報を収集し、新しい病態把握の作法によって、診断、治療あるいは予防医学に寄与する臨床医学であり、検査部は検査医学診療の実践の場である。

したがって、検査医学は臨床検査の方法論の開発と活用および臨床検査の解釈、吟味の進歩の上に展開され、直接的に臨床に連結するのである。そのために検査医学は新しい医療に

おける新しい診療科目として、つまり標榜診療科としての確立が強く望まれる。そして、そこでは日本臨床検査医学会の認定による、「臨床検査専門医」が、担当医として中核的役割を果たし、その人材の育成と確保は極めて重要なこととなる。

検査医学の研究分野では新しい臨床検査法の開発と導入と活用の方法論的課題、さらに各種検査情報を元にした新しい生態、病態の解析、検査医学的診断に関する研究に加えて、広範な各種医学専門領域における研究が主軸となる。

検査医学の診療分野は、臨床検査部内における実践と、検査診断学的思考を基盤とした病態解析にある。したがって実務として、日常臨床検査、至急・緊急検査及び特殊検査の管理運営、指導と、各種分析、機能検査(臨床化学、臨床血液、免疫血清、臨床細菌および生理検査等)の成績の解釈、解析、病態診断が、診療各科のコンサルテーションを含めて主務となり、これに伴う治療は副務となる。すなわち、望まれる標榜科「臨床検査科」では臨床検査と臨床との接点、接面において、新しい方式の検査医学主体の診療が展開されるのである。

臨床検査専門医は検査医学の位置と役割、臨床医学と予防医学に対応する施策と実行に加えて、さらに今日大きく成長してきた臨床医学の今後の方向づけをする。すなわち、新しい時代の医学、医療における検査医学を築くための柱とならなければならない。

1982年「臨床検査医会」が発足し、1989年に「日本臨床検査医会」となり、1990年4月1日に正式に誕生した。次いで2002年に「日本臨床検査専門医会」となった。そして、1991年2月に会の情報誌 JACLaP NEWS 1号が発行され、このたびは100号記念誌の発行の運びとなった。紙面も当初のB5からA4版へととなり、ページ数も増え、内容も拡充、充実し、読者も増えた。大変に喜ばしく感じられる。

今後益々の発展を祈念したい。平成20年5月6日記

## □ JACLaP NEWS 100号誌発行に寄せて

河野 均也 日本大学名誉教授  
(日本臨床検査専門医会第3代会長)

日本臨床検査専門医会の活動に関する情報をなるべく早く広報する必要性から発行されるようになった JACLaP NEWS も今年、100号が発行されるとの事です。歴代の編集者に心より敬意を表したいと思います。私は現役を引退して7年目に入り、現在登録衛生検査所の指導監督医として勤務しております。医療機関と離れて独立した検査所については、管理者が医師でない場合、検査業務に関して3年以上の経験を積んだ医師が指導監督医として選任されている事が求められています。登録衛生検査所に臨床検査に精通した医師を置くようにとの要望は日本臨床検査専門医会が設置される以前から、事ある毎に厚生省(現厚生労働省)に働きかけ続けて参りました。しかし、日本臨床検査専門医会の前身、臨床検査医会が発足した1982年の時点では認定医の数は僅か80名に過ぎず、当時の登録衛生検査所の総数800施設には遠く及ばず、我々の要望が承認されることはありませんでした。その後、認定医(専門医)試験受験者に対して臨床検査全般にわたる最低限の知識を得てもらうために、日本臨床検査医学会では教育セミナーや検査室マネジメントのためのワークショップが始

められました。また、平成8年度には保険点数に臨床検査を専門とする医師が常勤する検査部については、検体検査管理加算が認められ、臨床検査医の存在が次第に認知されてきました。さらに平成9年には長年の懸案でありました病理専門医と臨床検査専門医の研修プログラムの相互乗り入れが合意され、病理専門医が数多く臨床検査専門医の資格試験を受験されるようになるなどの追い風が吹き、臨床検査専門医の数も次第に増加しています。しかし、現時点においても臨床検査専門医数は536名を数えるのみで、しかもその殆どは大都市を中心に活動され、全く専門医が存在しない県すらあることは悲しい事実です。登録衛生検査医会所の指導監督医については、医師でありさえすれば精度管理や運営の知識が皆無であっても臨床検査を利用している実績があるという見方から、指導監督医として行政から認知されております。日本臨床検査医学会では、平成18年度から臨床検査管理医制度を発足させ、指導監督医として行政の認知を受けている方には一定の講習を受けて頂ければ今年度一杯、過渡的措置として臨床検査管理医の認定を行うと公告されています。臨床検査所に指導監督医として勤務している現在、衛生検査所の質を向上させ、正しい検査情報を臨床医に伝えるためには、何としても最低限の臨床検査室を管理運営する知識を持った指導監督医の確保が不可欠だと感じています。どうぞ皆様の周りに臨床検査専門医あるいは臨床検査管理医の資格を持たない指導監督医がいらっしゃる場合は強力的に臨床検査管理医の資格認定を獲得していただくよう努めて頂くことを願っています。此の頃です。

## □ 日本臨床検査専門医会の思い出

森 三樹雄 十文字学園女子大学人間生活学部 教授  
(日本臨床検査専門医会4代会長)

本会の発足当時から、庶務・会計幹事として会の運営にかかわっておりましたので、古い話も含めて、思いつくまま書いてみました。

・1986年に臨床検査医会の会誌(Lab CP)1巻1号を発刊する際は、岐阜市の長良川ホテル「錦の間」で開催された第一回臨床検査医会総会に間にあわせるため、当時の編集委員であった皆川彰先生、大谷英樹先生、中野栄二先生と一緒に徹夜して校正をしたことがなつかしい思い出となっております。

・会誌の英文名を決める際には、BostonにあるTufts大学医学部附属病院であるNew England Medical Center Hospitalの臨床検査部長であったProf. Philip Daustにアドバイスをしてもらい、臨床検査専門医をClinical Laboratory Physiciansと決めたことも印象に残っております。

・臨床検査専門医を増すため、日大、順天堂大、昭和大において二十年に亘り講習会を開催していただき、大変お世話になりました。専門医試験では、幅広い分野が出題されますので、予想問題を作成して受験生の皆さんのお役に立てるようになりました。

・専門医の名称については、臨床検査医、臨床病理医のどちらかにするか、当時の小酒井望会長、河合忠総務幹事も迷われたようでしたが、日本病理学会との力関係から臨床検査医と決定したようです。本会は、最初、臨床検査医会でスタートし、次いで日本臨床検査医会、さらに、現在の日本臨床検査専門医会に名称が変わり、会員数が増加し、内容も充実しま

した。

・本会の 2006 年の内保連への加盟は、簡単には認められず、反対する役員の方と丁々発止の長いやりとりの末に決まった経緯があります。

・最もうれしかったのは、平成 8 年度の診療報酬改定でわれわれ専門医の活動が評価され検体検査管理加算が認められたことです。当時の日本臨床病理学会 河野均也会長の指示のも

とに、日本大学臨床病理学教室での日常活動を厚生省の技官が実地調査を行われ、その結果、専門医の活動が評価されて、保険に収載された訳です。検体検査管理加算は現在でも検査部の収入に大きく貢献しております。

・現在の厳しい経済状況の中、臨床検査専門医が活躍できる場が広がり、臨床検査専門医の地位の向上につながることを願っております。

## □ JACLaP NEWS 100 号記念座談会

平成 20 年 7 月 5 日(土) 於 東京ガーデンパレス



JACLaP NEWS 歴代編集主幹

号数	開始	終了	担当主幹(当時の所属)
1~14	1991.2	1993.12	戸谷誠之(昭和女子大)
15~29	1994.1	1996.6	土屋達行(日本大学)
30~37	1996.7	1997.11	西堀眞弘(東京医科歯科大学)
38~50	1997.12	1999.12	木村 聡(昭和大学横浜市北部病院)
51~58	2000.2	2001.4	松野容子(山口大学;留学中)
59~62	2001.6	2001.12	満田年宏(横浜市立大学)
63~99	2002.2	2008.2	大谷慎一(北里大学)

司会・進行 戸谷誠之(下段中央)

出席者 土屋達行(下段左), 西堀眞弘(下段右),  
(上段左から)木村 聡, 金子 誠, 大谷慎一, 満田年宏  
(敬称略)

○戸谷(司会) 本日はお忙しいところを、JACLaP NEWS 100 号記念座談会にご参集いただきありがとうございます。

きょうお集まりいただいている方々は、JACLaP NEWS の歴代編集主幹ということで御活躍いただいた皆様です。さて、本紙はこの 7 月に発行予定号を以って 100 号となります。これを記念して特別企画を行う事になりました。その企画の一環として、本日の座談会を計画し、私はこの企画のゲストエディターとして、本日の司会を担当することになりました、宜しくお願いします。

既に御存じのように、日本臨床病理学会(現日本臨床検査医学会)に所属し医師資格を持つ会員の一部が中心になって 1982 年に勉強会を立ち上げたのが、日本臨床検査専門医会の前身であります。その後、種々の経緯を経て 1991 年から現在の専門医会が始まったわけです。この全国組織の医会が発足するとき、初代の会長を担当いただいた河合忠先生から、会員の緊密な連携を図るには、ニュース紙を発行して会員の交流を促すことを考えては?というお話がありました。当時、京都大学から東京の研究所に前戻っていた戸谷がその役を担当させていただくことになりました。私はそれ以前から米国臨床化学会の会員で、2ヶ月毎に送られてくる AACC news という機関紙に興味があり、その企画にも関心を持っていました。しかし、実際に担当するとすると、何分にも素人がやるニュース紙ですから、企画から編集、紙面の割り付けに至るまで、皆目分らず、関係の皆様には少なからず御迷惑をかけながらのスタートとなりました。しかし、担当するからには職能団体としての情報機関紙と言うことで个性的な内容が多くなるでしょうから、なるべく多くの方に愛着を持っていただける優しさや、判りやすさを売りにしたいとの思いで作業にかかりました。それが本日こういう形で 100 号を迎えることに、

その間を担当いただいた、土屋先生に始まり大谷先生にいたる、歴代編集主幹をはじめとして各担当委員の皆様による御尽力の賜と思います。そこで、本日は担当の先生方が行って来られた思い出になる記事・企画、あるいはこのニュース紙を盛り上げるための工夫などなどについて、お話しを伺うことから話を始めたいと存じます。

早速ですが、まず 1 号から 14 号は私の担当なのですけれども、それは既に少し述べましたので、その次を担当いただいた土屋先生のところからお話を始めていただければと思います。

○土屋 私が担当したのは 1994 年の実質 14 号からなのですけれども、実は記録を見ますと、13 号に編集後記で私が戸谷先生から引き継いだときに記載しております。

最初私が引き継いだときには、戸谷先生のしっかりやられていたところを何とかつながらなきゃいけないなということで無我夢中だったのが思い出されます。まだ思い出しますが、戸谷先生とお茶の水の聖橋の上でお会いして、JACLaP NEWS に使うイラストの本を引き継いだというのが最初ではないでしょうか。

それが綿々となつがっていることだろうと思うのですが、記録を見てみますと、いろいろな記事を計画して載せております。私が担当して一番よかったことは、今日いらっしゃいます西堀先生と木村先生にすぐスタッフとして入っていただいたことです。お二人の先生は強力な布陣でして、毎年何回か会って、1 年間の JACLaP NEWS のきちっとした筋立てをつくったというのが記憶に残っております。

記事の内容はそれぞれありますけれども、この中で記憶に残っているのは、やっぱり 95 年の 2 月に発行したとき、木村先生に編集後記として書いていただいたのですが、阪神大震災

のことが記憶に残っております。強烈な印象ですね。それから、各号で幾つかの企画記事をつくったのですが、この会の趣旨として、GLM とか春季大会とか教育セミナーというのをきちっとした形で広報できたのが記憶に残っています。それと、それまでは漠然としたものがありましたが、最後に引き継ぐときに、1996年の2月にJACLaP NEWS 編集の手引きとしまして、西堀先生、木村先生の御協力を得て、こういうふうやって編集はしていただきたいということを書き残しまして、西堀先生のおかげでインターネットで公開したというのが非常に記憶に残っています。それぞれの記事については余り記憶が定かではないので、こちらでは省かせていただきたいと思います。

○戸谷(司会) 今お話があったように、こういう時間経過を見ると、臨床検査医の立場とか臨床検査に対する世の中の仕組みが変わったことと本紙紙面の様相が連動していろいろな変動模様を感じられるのですが、西堀先生は第3代編集主幹を担当いただいたわけですが、続いて先生の方からお願います。

○西堀 私は、土屋先生が戸谷先生の後を築かれたものをしっかり和形までつくってくださっていましたので、私のところで特に JACLaP NEWS 自体を自分のアイデアで何とかしたということはそんなになかったんじゃないかと。

○戸谷(司会) B5判から今日のA4判になったのは先生のときだったですね。

○西堀 先生が編集委員長でしたね。戸谷先生の御指示のもとに、そろそろそうしなさいということでそういうことはやったことはございましたけれども、ある程度で上がった中で仕事をさせていただいたので、非常にやりやすく、かつ、戸谷先生、土屋先生が非常に温かくサポートしてくださっていましたので、その当時私も若輩でしたけれども、何とか務めることができました。

1つ、これは JACLaP NEWS そのものではないのですが、私として思い出に残っているのは、その当時、ちょうどインターネットが普及を始めた時期で、これはぜひ、検査学会というものがまだ十分認知されていないのであるならば、そういうものの力を借りる、しかもそれを先導するということは、1つ目玉になるのではないかとということ、当時としてはかなり無謀で、海のものとも山のものともわからず、私としては確信があったわけですが、そういうことを御相談申し上げて、ホームページであるとか、それから、今、JACLaP WIRE という名前がついておりますけれども、そういうものを、記事を重ねた形で始めさせていただいた。そちらの方が非常に印象に残っておりまして、これ自体がどのような効果があったかというのはよく自分ではわからないのですが、今に至って続いているということは、それなりの価値があったのかなと。

やはり、繰り返しになりますけれども、そのような無謀なことを、反対どころか非常に後押ししてくださった戸谷先生、土屋先生の非常に寛大なといいますか、先見の明で私のようなことをさせていただいたということで、いまだに非常に感謝している次第です。

○戸谷(司会) ちょうど時代が IT 化への移行が叫ばれ始めた時期とうまく連動してきたということもあると思うのですが、西堀先生にはその辺の能力に非常に長けておられることもあって、この JACLaP NEWS を WIRE 紙にするところ

でも御活躍いただいたのは私もよく記憶に残っています。

では、続いて、その後を担当いただいた木村先生、何か一言、まず御自身の担当しているところでの思い出、御工夫などありましたら御紹介いただけたらと思います。

○木村 私自身は地方から出てきた人間なものですから、たまたま東京に転勤になって、お声をかけていただいてこういう仕事をやらせていただいて、とてもありがたく思っています。東京におられる方にはこういうのは余り御実感がないかもしれませんが、地方にいと声を出したくても出せないというのがあります、なるべく自分も原稿をお願いするときは地方の方々にお願いしてはきているのですけれども、もっともいろいろな方々に原稿をお願いすればよかったなと今は思っている次第です。やっぱりどうしても知っている人が先に頭に浮かんでしまうのですけれども、原稿を全然知らない方にお願いしても、当時は断られる確率は2割以下ぐらいだと思っております、結構皆さん、書いていただくと、なかなかふむふむおもしろいなという話が出てきまして、もっとそういうのをできればよかったかなと思っております。

あとは、西堀先生が JACLaP WIRE をお立ち上げになって、今まさに情報提供の主流になっていますので、できればもっとも毎日のようにそういう情報が出るような、それだけの人とお金があればいいのですけれども、そういう方向に発展していくといいかなと思っております。

もう1つは、検体管理加算が導入されてから病理の先生のメンバーが非常にふえていただきまして、パワーを感じているところなのですが、ぜひその方々にももっと御発言いただいて、御奮闘いただきたいと思っております。自分自身は確かに忙しい合間で、荒っぽいやり方で申しわけありませんでしたが、でも、土屋先生に大変よく教えていただきまして、お酒も飲ませていただきまして、おかげさまでいい勉強をさせていただいたと思っております。ありがとうございます。

○戸谷(司会) 木村先生の後には松野容子先生がご担当だったのだけれども、現在はアメリカに滞在中で本日は御参加ではないのですが、松野先生との関係ではどんなことがあったか覚えていらっしゃいますか。

○木村 なるべく地方発信ということで格好の機会と思いましたが、ご不自由はなかったようでした。それよりも重要なのは、忙しい医師が業務を縫って行う編集なものですから、やはりよい出版社と組むというのが大切だと思えました。一時期、コストさえ安ければどこでもいいみたいなのがあった、この手のものを全然つくったことがない会社に頼んだことがあって、えらく苦勞した覚えがあるんですね。その意味では、今はよいパートナーが見つかっていいんじゃないかなと思っております。多分、松野先生も同じ考えではないかと思っております。

○戸谷(司会) ということで短期間で、次の編集主幹は急遽満田先生に後を担当いただいたのだと思うのですが、

○満田 ちょっとバタバタしている中、松野容子先生の御留学を契機に私が引き継ぐことになりました。私が担当した期間は短かったのですが、JACLaP NEWS というものの編集を体験させていただいた上で、その後、WIRE の方をメインにやっていただけないかということ森三樹雄先生から御指示いただきまして、その後、WIRE の方の展開を中心に任せていただくようになりました。

WIRE は現在 107 号まで出されているようですが、少し WIRE の話もさせていただけてよろしいでしょうか。

○戸谷(司会) どうぞ。

○満田 WIRE は、私は 43 号から 92 号まで担当させていただきました。実は西堀先生が 1998 年に第 18 回医療情報学連合大会で「電子メール新聞を中心とした臨床検査医のネットワーク化について」という御演題を発表されておられまして、検査の世界だけにとどまらず、医療情報の世界にも情報発信していているというふうな経緯がございました。紙媒体の紙面とメルマガという、性格が少し違うものの中で情報をいかにうまくすみ分けて発信していったらいいのかということが、編集を重ねる中で非常に大きな課題と私自身の中ではなっていました。もう 1 つは、やはりリソースとして価値のあるものを早く伝えるというメルマガの性格を生かせるようにするにはどうしたらいいかということです。

JACLaP NEWS の編集で一番苦労したしたのは、執筆をなかなかお受けいただけない場合があったことです。お願いはしたのですが、それぞれの先生方にも御事情がありますので、早目にはお願いしてもなかなか現実的にはお受けいただけないということも体験いたしました。ニュースの速報性と情報量の安定性という課題を抱え森先生といろいろ御相談していったのですが、そういった中で、44 号から 81 号までは、じほう社にお世話になりまして、“The Medical & Test Journal” という情報紙の記事をアブストラクトの形でいただくことができましたし、81 号からは、薬事日報社から“Medical Academy News” という形の記事をいただきました。振り返ってみますと、2007 年 9 月 25 日号でこの記事の内容がちよっと途絶えているので案じてはいるのですけれども、また、森先生御自身が会長をされている間、記事として WHO のいろいろな記事の翻訳をさせていただきまして、これも世界視野で検査あるいは医学の世界を見るということで、非常に会員の方には情報源としていいものになったのではないかなと考えております。

○戸谷(司会) いろいろと御工夫、御苦心があったことはよくわかるのですが、その後、極めて直近まで大谷先生に非常に長期にわたって御担当いただいたわけですが、最近のところぜひ何かありましたら、お願いします。

○大谷 満田先生が JACLaP NEWS から WIRE の編集主幹に移られるということで、2001 年の 12 月にお話をいただきました。翌月、63 号からお手伝いをさせていただくことになりました。最終的には 99 号まで、全部で 37 号分で 6 年間、足かけ 7 年という期間でしたが、本日のこの名簿を拝見させていただきまして、もっと早くやめるべきだったんじゃないかという思いを感じました。結果としては本当にありがたいといえますか、貴重な経験をさせていただけたという気持ちで一杯です。会員の先生を初め諸先生方に御協力いただいたことに大変感謝しております。

記事の中の企画という事では、当初はやはり右も左もわかりませんでした。最初の企画としては、群馬大学の玉真先生のアメリカでの研修日記の連載を新企画として始められました。これは森先生の御配慮等ございまして、67 号からでした。全 13 回連載され、AP/CP の研修ということで、若い先生方をはじめ今までにアメリカ留学を御経験された先生方にも非常にためになる記事ではなかったかと思っております。

さらに、78 号から「臨床検査専門医のための組織マネージメント」を西山病院管理研究所の西山先生に全 6 回で組織マ

ネージメントについての内容の記事を書いていただけたということと、79 号から同様に「臨床検査専門医のための財政マネージメント」ということで、なかなか紙面では勉強できないような内容でしたが、日本大学商学部の高橋先生に、これも全 6 回ということで連載していただいたということが大変思い出に残っております。

あとは、思い出といえますか、検査の先生方だけではなく、先ほど木村先生がお話しされましたが、病理の先生、やはりオーバーラップする業界といえますか、そういう関係の先生方にもぜひ知っていただきたいと私は思っておりますし、できれば検査専門医というものにも興味を持っていただいて、お互い交流できるようなものができればとも考えておりましたので、私は比較的検査だけではなくて、病理の先生方とか、輸血を担当されているような会員の先生方にもコラムを書いていただきたいということで、そういう先生方にも積極的にお願いをして、検査、病理、輸血というものがうまく載っていくというのも 1 つかとは考えて進めておりました。

結果的には、お願いした先生方には記事は書いていただきましたし、お互い考えているところも先生方に伝わったとは思っておりますが、今となっては大変いい思い出でございます。

○戸谷(司会) ありがとうございます。

各先生にはこれまでのご苦心、ご苦労の一端についてのお話を伺ったわけですが、要するに、この JACLaP NEWS は短期的視点からの情報を発信するというのがその目的でして、これもよく御存じのように、本会には Lab CP という読み物誌があるわけですから、そちらとの使命の分野をどのように住み分けするかというのが当初からの課題でして、そういう意味で、既に述べたように、会員の生の声を速やかに伝え、そしてそれをどのように生かすかということが大きな役割と当初から思っていたわけです。

先ほどの話にも出しましたが、発刊当時の一般的な書式が B5 判という判でしたから、最初は B4 判の 2 つ折りの B5 判のものを出したわけですが、そのうちに少し記事量が不足であるということで、中にまた B5 の裏表を入れた 6 枚ページにして、さらにそれをもうちょっとふやすなりのこともあったわけですね。本誌の発行を始めてすぐの頃に、学会の保険委員会を担当された森三樹雄先生が保険の新規収載検査についての情報をこの紙を使って出したいとおっしゃって、これは土屋先生にもご活躍したので・・・。

○土屋 ええ、ちょうど切りかえぐらいのときでした。あの記事は本当に評判がよくて、会員の皆様方で最新の保険適用になった検査について非常に細かく、僕たちの一番聞きたいようなところが書かれているものですから、非常に評判がよかったですね。あれもずっと私もっております。

○戸谷(司会) あの記事は、商業紙の薬事日報検査版の方にも同時掲載という形に後でなり、とてもヒットした企画でした。

○土屋 そうですね。ものすごく評判がよかった記憶があります。

○戸谷(司会) その他の思い出として、私はもともとは愛知県人ですが東京在住が長い人間だったのだけれども、たまたま縁があって京都に行って、いわゆる東と西と両方の風向きの違いというのをつぶさに感じたので、「東風西風」というようなタイトルを勝手につけて、会員の交流の場にもしよう

ということで、これがいろいろな会員の声を交流の場として企画したのですが、この企画はさらに発展させていただいたように承りましたが・・・。

では、この辺で、発行にまつわる失敗というか、いろいろトラブルというか、思いがけないようなアクションがあったとかというようなこともあったのではと思うのだけれども、今だから言えることになるとと思いますが、何か先生方の中でその辺ちょっと御披露いただければと思うのですが、いかがでしょうか。

○土屋 ちょうど僕が担当したときには、ワープロがようやく普及して、パソコンも普及してという時代だったのですけれども、原稿の依頼や何かは、こちらの方にひな形が幾つかありますが、郵送でやっていたのですね。すぐ書いてくださる先生もいるし、先ほどのお話じゃないですけれども、なかなか書いていただけない先生がいたり、さらには返事もいただけないような先生もいるというのは普通の本と同じように苦労しました。ただ、一番最初に目標とした、JACLaP NEWSの大きな目標である即時性、そういうところに一番重きを置くためにはやっぱりすぐ書いていただかなければ困るなというところがあります。これは中の記事もそうですけれども、実はもう1つ大事なことがあります、事務局便りが結構、いわゆる臨床検査医会、当時の検査医会ですね、その後の専門医会ですけれども、そこからの事務局の情報というのをいただけることが非常に大事なのです。これは庶務・会計幹事の役割なのですが、すぐ書いていただける方と、ぎりぎりまで、あるいは既に印刷に回ってから最後に入れるというようなこともやったことが記憶に残っていますね。

○戸谷(司会) 今ちょうど手元に第1号からのJACLaP NEWSありますが、今見てみると、全体的な体裁は基本的に変化がないと見えるのですが、一つ一つの企画内容や配置など細かな点では変化が感じられます。いかがでしょうか。ほかにもし何かあれば。木村先生、何かありますか。

○木村 1つは、さっきの出版社の話ですね。結局、医学用語がいっぱい出てきますので、それをわかっていらっしゃる方に校正をしていただかないと、とんでもない単語に変換されていたりするんですよ。随分とそれで苦労いたしました、やっぱりわかっている所と組む必要がある点です。

もう1つは、これは今だから言うのですけれども、没になった記事の1つに、当時、学会費の納入率が悪く、私のいた教室で事務局をやっていたため、どういところが悪いか分析してみました。その結果、要するに、ポストが納めていないところは下も納めていないという結果が得られましたが、記事にはなりませんでした。

○土屋 確かに最初のころは校正に随分神経を使いましたね。今のインターネットみたいに原稿をそのまま張りつけるわけではなくて、版を組みますから、誤植というか、やっぱり・・・多かったですね。

○戸谷(司会) 最初のころ、ヘッドラインのJACLaP NEWSというところから巻数・号数のところは、今お話があったように、全部を印刷屋に保管して、写真原板で残してこれを順送りですべて使っていたのですね。そうしたら、あるとき、担当の印刷屋さんがうっかりして前の写真を全部そのまま使ったものだから、日付とか号数が全部古いままで、記事だけ新しくして発行というようなミスをしたことがあります、慌てて印刷屋さんがまた刷り直してという大変な思いをしたことが

ありました。いろいろと素人のやっていることで、苦労もあったと思います。

さて、回顧録はこの辺までとして、本日100号の企画を前にして、今後もJACLaP NEWSは継続していただきたいと私も思っているわけですが、現在の若い会員の方々へ、あるいはこれからJACLaP NEWSを盛り上げる皆さんに対して何か御意見とか御希望とかがあれば、その辺をお話いただけるとありがたいと思うのですが、では、今度は若い方から、大谷先生から宜しければ順次お話いただければ・・・。先生は特に長いこと御苦労いただいたわけで。

○大谷 若い先生というか、この冊子を読んでいただけていた先生方というのは、本当にいろいろな意見とか考え方をお持ちになっているのだなということ、それがしかもタイムリーな形で、同じような時期にはやはり同じようなことを先生方というのは考えていらっしゃるんだという事を多分感じていただけたのではないかと思います。本当に検査の浮き沈みがあり、最近多少はいい方向になっているのではないかなど、外来迅速検体検査加算等ができましたので思いますが、少し沈みがちだった時期でも、もっと頑張ろうというような意見も実際JACLaP NEWSでは書いていただけましたので、いろいろな御意見はあると思うのですけれども、それを理解した上で、さらに自分の信じるというか、進む道もより飛躍的に考えられるような前向きな姿勢を常に持っていたいただきたいと思います。

若い先生に記事としてお願いしたのは、どちらかという専門医の合格の後にお願いして、その合格された年の先生にはかなり自己紹介等を含めて書いていただいて、若い先生の考えをこの紙面でお伝えできたかと思っています。「会員の声」の特集も最後の方はできましたし、やはり若い先生の声もこういう情報紙でタイムリーな形で伝えられるような環境はこれからもつくっていただいて、反映させていただきたいと思っています。

ただ、若い先生ではなくて、もう1つ、かなり御高齢になった、年長者の御意見も最後の方はやはり取り入れてみたいということで、名誉教授の偉い先生にも実は、メールで通信が可能かということをおっしゃったのですけれども(笑)、一応送りましたら、ちゃんと返ってきました。やはりこういう先生方もきちっとITに乗ってやっていらっしゃるんだなということをも身をもって感じたということで、多少やはりバランスをとった運営をこれからもやっていただけて、両方の意見を参考にしながら、道が見えるような形がいいのかとは思っております。

○戸谷(司会) では、続いて満田先生、いかがですか。

○満田 今、ネット上のホームページの方で過去の記事が読める部分があるのですけれども、温故知新ではないですけれども、そういった振り返りといいますか、たまっている中にも情報ソースはいっぱいあるのかなということ、関連するところ、気になるところ、いろいろ検査実務につきながら悩んだり苦しんだりしている解決策が情報ツールとしてこういった記事になって見られるというふうなのが非常にいいのかなど。発刊した当初は紙媒体で出ていましたが、メルマガもそうですけれども、紙媒体のものもホームページの資料庫としてぜひ御活躍いただきたいなとも思います。

○戸谷(司会) やはり紙媒体とWIREとでは違い……。

○満田 そうですね。

○大谷 JACLaP NEWS の 62 号からバックナンバーで専門医会のホームページから見られます。

○戸谷(司会) 紙媒体と WIRE 紙では違う部分がありながら、非常に共通性のあるところもある、それぞれのモチベーションの違いを如何に活かすかがありますからね。

それでは、続いて木村先生、何か一言、今後の JACLaP NEWS に対する期待等々。

○木村 もっと多くの方に参加していただきたいということでして、編集委員をやりたいとか、あるいはもう少し検査医としての政治的な発言をした方がいいのではないとか、そういう御意見をいただきたいと思うわけです。一方的に僕らの方で情報を発信するだけでいいのかなと思うことも、迷うことがございますし、その意味で、電子メールというのできるようになったのが、ちょうど僕が編集をしているところからだったのですけれども、お返事をいただけるのが非常にうれしかった覚えがあります。ですので、お読みになっている先生方でも、自分が編集委員をやりたいとか、定期的に何か書かせてほしいとかいうお話がございましたら、ぜひ歓迎したいと思う次第であります。

○戸谷(司会) では、西堀先生から。

○西堀 私は、正直申し上げて、現在、検査の領域を離れた形になっているので、余り偉そうなことは言えないので、私としては、一応立ち位置としては、インターネット、IT ということで、これから、今、インターネットが普及したということなのですけれども、一応私は、まだこの発展というのは終わっていないと思っております、紙と並行で、今までの既存のメディアと並行でいろいろ物が行われているということがあるので、置きかえて使っている状態というのがまだ今だと思えるのです。郵便にしても、ファックスや何かと基本的には同じ。もちろん直接コピー・ペーストできますから間違いも減るわけですが、行動様式のパターンを変えるところまではいっていないのですけれども、今、携帯電話が非常に普及しているということで大分様相が変わっているわけですが、具体的なメーカー名を挙げるとよくないと思うので挙げませんが、某会社から世界戦略で、今までと全く違った形の携帯電話が日本でも発売される、世界的に発売される。あれは実は携帯電話がすごくただけではなくて、すべてのメディアを置きかえる可能性があると思っております。ということは、今は、携帯電話を持っていて、電話はできるけれど、ほかのことは紙でやっていますけれども、すべてのことがそれでできるようになる時代がそんなに遠くなく来た場合に、やはりそれにさらにおくれないように乗っかっていく、もしくはできれば先取りをするというふうなことでうまく活用して……。もちろんコンテンツが大事、要するに検査のこと自体がもちろん大事なわけですが、それをいかにうまく人々に伝えるか、アピールするかというテクニックの方も今まで以上に力を持ってくる、それがいいことか悪いことかわからないのですが、力を持ってくる時代になると思いますので、その辺の活用というのがさらに推進されるのではないかと感じを持っております。

○戸谷(司会) 確かに私どもは、ニュース原稿を情報の提供側と受け手という立場から考えなければいけないものだと思いますが、そういう意味では、どういうツールでその情報を出すかということは確かに時代とともに変わるので、では、土屋先生、いかがでしょうか。

○土屋 JACLaP NEWS ということに限りますけれども、皆さんおっしゃっているように、若い方からどんどん、僕の一番最初の希望としては、紙面が足りなくなてしょうがないというぐらいいろいろな御意見が、飛び込みでもいいからいろいろなものを寄せていただければいいなと感じております。大谷先生のおっしゃったように、経験の深い方の御意見も確かに大事ですけれども、やっぱりこれからの方々が自由にいけるように。ですから、投書箱みたいなものも一部に載せてもいいんじゃないかなとは感じています。それに対してのディスカッションをその紙面でやってもいいかなと感じています。

○戸谷(司会) 今回、初めて座談会をこの様に行い、その内容を掲載するわけですから、当然そういうディスカッションなどにもこの紙面を使うというのはおもしろい方法ですね。

○土屋 おもしろい方法だと思います。特にこういう電子媒体が発達してきましたから、あの中でのディスカッションもいかもしれませんけれども、できればこういう形で残したい。つまり、御意見を 1 つ寄せていただいて、それに対してメールや何かで寄せていただいたものをそのまま掲載するというような形も 1 つの形かな、これからの形かなと思います。そうすると、紙面として残りますから、いい媒体になるんじゃないかなとは感じています。1 つのモデルと言ってはなんですけれども、西堀先生が頑張ってくれた、ちょうどインターネットで JACLaP WIRE を立ち上げたとき、私は編集委員会の委員長だったのかな。大場先生が会長でやったのですけれども、そのときに Q&A というのを別なところで立ち上げたのです、ホームページのところ。あれが爆発的にどうか、質問が多数寄せられて、いわゆる回答を書きいただく先生方をお願いするのが非常に大変だったことを記憶していますけれども、あれだけ需要があるのですよね。今では余りにも多過ぎるのと、それから会員外の人が多くなってしまったものですから、会員外の方は質問として寄せられなくしてしまいましたけれども、そういうようなものもできればなと考えています。

○大谷 JACLaP NEWS が 6 ページというのは最初からの構成だったのですか。

○戸谷(司会) 最初は、ここに今ありますけれども、4 ページ。そのうち黄色いページが入って、これがだんだんと定常化した中で、大分してからですよ、入れたのは。今は 6 ページになっていますかね。

○土屋 だから、昔は記事を集めるのが大変だったんですよ。

○大谷 6 ページというのは、私が一番注意したというか、絶対に 6 ページを載せ切ろうという、その根性はあったんですよ。満載にして出すということが、本当につらかったときもありました。今思うと、これが半分ぐらいしかないようだと寂しいというか、何となくそういう意見もないのかなというふうにとられてしまっはという思いがありました。多いときですと 40 名ぐらいにメールを送って、それでも返ってこないとかありましたが。

○土屋 大谷先生の時代はメールで依頼とか、あるいは書いていただけますかというのを聞けますけれども、僕らのころは全部郵送で、一か八かで、あとは電話ですから。電話もまずつかまらないですよ、皆さん。

○木村 だから、学会の懇親会あたりで目星をつけた先生にお話しさせていただいて。(笑声)

○戸谷(司会) 記事をどの様にお願ひするかは確かに大変な努力です。それから、どういふ企画、毎号毎号それなりの特徴が出てきていると思うのですけれども、その辺の特徴を出すのも大変なことだと思いますね。

○満田 ダヴィッド社のイラスト図鑑というのは、No.16、1994年の4月号から採用されているのですが、これはどういふ経緯で?

○戸谷(司会) 実は、冒頭でもお話したのですが、本紙の発行に当たり何かチャームポイントと言うか、柔らかな雰囲気をと考えたのです。たまたま自宅の書棚にあった、息子の図工の参考書だと思ふのだけれども、イラスト集から季節感にあった植物の植物図などを使ったのです。そうこうしているうちに、イラストにも著作権があるから勝手に載せてはいけないんじゃないかということに中々なってきた、関係の方などのご意見も上がった結果、たしか丸善さんでしたね、イラスト掲載を前提として、無償提供の図版集があることを知ったのです。この医会としては、本来的な備品としては意外なものなのですが、早速買ひ求めた物が先ほどご指摘のあった図書として、これを代々の主幹にお渡しするということにしたわけです。

この話をしたついでに、もう一つ思い出話をしておきたいのですが、それは第1面の右上にあるJACLaP NEWSのロゴマークについてです。これにも、いわく因縁がありまして、昭和64年(1989年)の第36回日本臨床病理学会総会のときのことです。この総会は当時、京都大学臨床検査医学講座に居られた村地孝教授が担当され、先生は種々の斬新な企画を打ち出されたのでご記憶の方も多いと思います。私も教室員の一人として先生のお手伝いをさせて頂きましたが、その総会のロゴマークが本会のロゴマークの原型です。初代会長の河合先生がこのマークをいたく気に入られまして、本会の発足に当たり、あのロゴマークを少しリモデリングして使いたいと言われたので、村地先生に御相談したら、いいよと快くおっしゃっていただきました。このマークが意味するところは、集合と分析、要するに、検査というのは医療の中のいろいろな情報を集めてきて、それをまた検査(解析)した上で皆さんにお返しする、そういう検査医の役割をあらわしています。そして、「1982」はこの前身の協議会が、それから「1990」は新組織に移行した年、この2つを配置してJACLaPというふうにしたのです。

○土屋 その後、河合先生がこういうネクタイ、検査医会の会員用のネクタイで、これともう1つ、ブルーのがあるんですよ。

○戸谷(司会) このネクタイもたまたま知人が手伝ってくれて、会のロゴマークを入れた特製品です。

○土屋 きょう探してつけてきたんです。

そのイラストのこと、一番最初にお話しした、戸谷先生からその本を受け継いだのがこの主幹の引き継ぎだと感じたのですが、ごらんになっていただくとわかるのですが、戸谷先生は、イラストはお花が多いですね。ところが、私が担当してからは食べられる物ばかりなんです(笑)。

○木村 私は全国の祭りばかりでした。

○満田 選び方にも癖があるんですね。

○土屋 季節季節の食べ物をそのイラストから選びましてね。魚とか何かを選んで

○満田 実は、担当するよふにという御命令が下ったときよ

りも、その図鑑を受け取って手にしたときの方がむしろ重みを感じた次第でして、ぜひこの重みは受け継いでいただいで(笑)。

○大谷 私はどちらかという季節を意識したりして、お花も好きですし、そういうもので。

○戸谷(司会) 皆さんそれぞれに工夫をからしたイラストを入れていただいで、それを見るのがまた楽しみなわけで、これがJACLaP Newのチャームポイントになったと思ひています。

話も盛り上がって来ましたが、きょうは101号から担当いただく金子先生にも同席いただいでいるので、前任者の話をお聞きになって、お感じになったことも含めて、今後のことを一言お願いできますか?

○金子 本来は参加する予定ではなかったのですが、大谷先生の後任としてJACLaP NEWSの編集を担当させていただくことになりました経緯で、歴代編集主幹で御活躍された先生方のお話は何える貴重な座談会に参加でき大変光栄です。今お話を聞かせていただいた中でもよりよくしていくための工夫とか御苦勞話とかをお伺ひしていくうちに、100号まで発刊したという伝統のような重みがひしひしと伝わってきました。また電子メール化やホームページの利用など新しい情報伝達のお話、内容に関してのどんどん発展させていきたいという、これからの新しいJACLaP NEWSについても多数のご提案をお伺ひできました。これら2つを背負うような形で引き継ぐことは、プレッシャーに負けそうな感じですが御期待に沿えるように頑張りたいと思ひていますので、御指導をよろしく願ひいたします。

○戸谷(司会) どうぞよろしく願ひいたします。

それでは、そろそろ時間のようですので、きょうは思い出話のみならず、本紙に対しての貴重な御意見をいただいで、ありがとうございました。今後さらにJACLaP NEWSが紙媒体及びWIRE紙の両面において一層の発展することを願ひ、つたない司会を終えたいと思ひます。どうもありがとうございました。

## □ あとがき

100号は一つの区切りである。それを目出度いとか、ご苦勞さまと言うか、単なる通過点とするか、それは各々の考え方である。しかし、何事も100の蓄積は1から99までの次に來るので、それなりの重みはあろう。

理屈を捏ねるのはここまでとして、ともかく、100号記念号をお手元にお届けする。

時代は確実に変貌を遂げている。そして当臨床検査専門医会も然りである。次なる100号が発行されるか否かは現状では皆目不明である。しかし、検査医の職務は不滅である(そう固く信じたい)。会員の相互の協力と連携のためにどの様な方法であろうと情報の緊密な連携は絶やしたくない。

渡辺清明会長から、ゲストエディターとしての要請を受けた。しかし、その任を外れてからの時間経過は多くのことを忘れさせた。その結果、佐藤庶務担当幹事、事務局の矢部由紀子さんのご協力無くしては本紙の発行は成就しなかった。記して感謝申しあげる。さらに、本紙100号は当初7月の予定であった。しかし諸般の事情から約1ヶ月の遅延となったこの点もお詫び申しあげる。

多謝 M. Totani